

0. はじめに

今年度も高校選択授業「東北と復興」の石巻市スタディツアーが7月28日から7月31日に無事に実施できた。今年度も多くの方たちに関わっていただき、お世話になりました。ありがとうございました。

ここでは今年度のスタディツアーの行程と一人の引率教員としての私の感想を書いていきたいと思う。

1. 今年度の授業のテーマ

2026年度の選択授業「東北と復興」のテーマは、「表現としてのA r t」である。普段、学校の授業の中では何らかの教えたいことを教師が様々な方法を駆使して表現していく。言葉、数字、写真や映像、パワーポイントを用いた動的なスライド、身振り手振り、端的にまとめた黒板など。歴史・地理・公共にかかわる概念やその概念と概念の結びつきを、用語や事実を用いて表現していく。それゆえに時にその用語や事実の「暗記」に終始するのではないかという批判が根強くある。「社会科は暗記科目だ」という言説は、ポジティブにもネガティブにも、生徒・保護者・教員、様々な層の人たちが言う。確かに教育の中には、用語や事実、定理や構文などを当たり前に使いこなすために、その前段階としての「暗記」は当然にあり得ると個人的には思っている。もちろん「暗記」するまでのプロセスとして、好きで自然と覚えたのか、一夜漬け的に必死に覚えさせられたのかの違いはあるだろう。

しかし「東北と復興」で出会うこと、景色や言葉、出来事などは簡単に言葉として表現しえない領域にある。死者〇〇人、行方不明者〇〇人…といった数字的な表現も、「あのとき私はここにいて…」という語りによる表現も、ある一瞬を写し取った写真もその前後の多少の幅がある映像も、すべて起こった出来事のある側面を理解できるように表現されたものである。その意味ではその表現がすべてであると、理解したように思うと、その表現の裏にあるさらなる本質的な何かをそぎ落としてしまうのではないかと考えた。「あのとき私はここにいて…」という語りの指す「あのとき」とは？「ここ」とは？文字通りに表現された部分と、表現しようとした結果文字になっている部分と。その両方について一緒に考えることができるようにしたい。

そこで今年度は東日本大震災とその復興の中で起こっている言語化しえない、あるいは語りえない、可視化できないような「何か」を考えるために、それでもその「何か」を様々な方法で表現しようとしている人たちの作品や活動に焦点を当てようと考えた。「表現としてのA r t」に焦点を当てることによって、その本質そのものに迫る可能性があるのではないかということであった。

ここからは実際にこのテーマのもとに宮城県石巻市スタディツアーがどのような行程であったのか。そしてその中でどのように感じたのかを書いていく。

2. 全体の行程

7月28日(火)

午前;大宮駅から石巻駅へ移動・「生きる家」見学・ちばふみ枝さん講演

午後;震災遺構門脇小学校・南浜ツアー・MEET 門脇(3.11メモリアルネットワークの方の案内のもと)

7月29日(水)

午前;震災遺構大川小学校・Team 大川未来を拓くネットワーク只野哲也さん・佐藤周作さん講演・案内雄勝ローズファクトリーガーデン・雄勝花物語共同代表徳水博志さん講演

午後;雄勝ローズファクトリーガーデンにてボランティア作業

7月30日(木)

午前；2チームに分かれてみやぎ民話の会の方たち(代表；島津さん)と活動

午後；みやぎ民話の会の方たちから話をきく・石巻市博物館見学

7月31日(金)

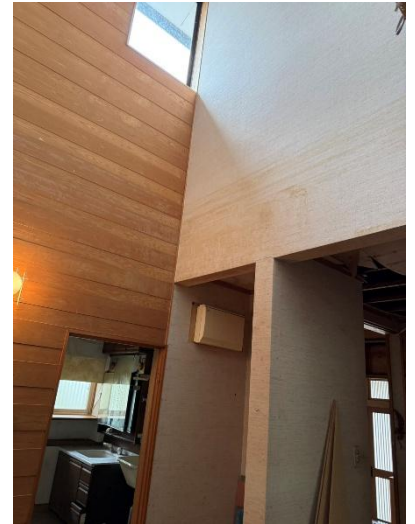
午前；志賀理江子さんオープンスタジオ見学、講演

午後；リアスアーク美術館・館長山内さんの案内

3. 具体的な内容と感想

1日目(7月28日)

今年のスタディツアーのはじまりは、ちばふみ枝さんの「生きる家」訪問だった。「生きる家」は、石巻市の渡波にあるお家である。もともとはちばさんのお父さんが建てられたマイホームで、現在の家主のちばさんが育った家でもある。東日本大震災の際に被災し、一階の天井上まで浸水した。震災後、この家をちばさんは家主として引継ぎ、アトリエ兼物置としてこの家を使用されていた。その後2019年ごろにこのままでよいのかと思い始め、2023年に「生きる家プロジェクト」としてオープンスペースの開催にいった。震災前にたっていた「家」が、震災後も「家」として時間を重ねている。ちばさんからいただいたプリント資料には「家に刻まれた経験としての津波のことや、その他様々な記憶について家自身に語ってもらいながら、お越しいただいた皆さまにとっても語るきっかけとなるような、そんな場所としてお過ごしただけでしたら幸いです。」とある。



高校生たちは、ちばさんから最初にお話をうかがって、松井至さんの短編ドキュメンタリー『家は生きていく』を鑑賞し、その後自由見学とした。1時間程度である。家には震災以前の写真や被災物、津波の跡が残る壁紙などの震災の記憶、震災後のオープンスペースとして活用される中で新しく置かれた作品等があった。

印象に残ったのは、記憶に残すことが行為や実践を通じてなされるということである。頭が器状になっている人形の陶器群でなる作品があり、その頭の器状の部分の縁いっぱいまで水が入っている。持ち主が水を注ぐ行為によって完成するその作品は、水を注ぐたびになぜここに水を注ぐのかを思い起こさせ、結果的に記憶することを、水を注ぐという行為を通して可視化している。仏壇に水を注ぐ行為はその度ごとに死者を思い起こす意味がある、というのをどこかで読んだ気がするが、そのこともあってこの作品が印象に残ったのだと思う。ちばさんもお気に入りだそうだ。

スタディツアーは、関東、埼玉県から宮城県石巻市へ訪問するという意味もある。その意味では、「生きる家」の玄関で「おじゃまします」といって訪問する経験も何かを示唆しているような気がした。「生きる家」への「おじゃまします」から始まった今回のスタディツアーは、石巻市で出会う人たち、震災遺構、展示されているモノ、景色や場所、音や風や匂い。様々な場所に残る震災前、震災当時、震災以降の現在までの日々の記憶の痕跡に触れる旅でもあったのだと今、改めて意味づけている。

午後は南浜門脇地区フィールドワークで、今年は少し曇りで途中から雨も降る中での実施となった。昼食を毎年恒例の石巻げんき市場でとったのち、震災遺構門脇小学校で3.11メモリアルネットワークの藤間さんと合流する。案内を担当されるのは今回で4回目である。「生きる家」プロジェクトについても藤間さんから教えていただいた。震災遺構門脇小学校、南浜復興祈念公園、そしてMEET門脇の順でまわった。



昨年からの変化として感じたのは、震災遺構門脇小学校を補強する鉄筋コンクリートの歩道のところに、小学校の中についての写真をつけた展示パネルが増えていた。展示パネルが増えて、明るさや角度などによって外から見ても見づらかった部分が、分かりやすくなった側面があるなど感じた。おそらくは震災遺構を設置している人達が訪れる人向けにされた工夫なのだと思う。一方で、案内してくださる藤間さんは、毎年のご案内の中でこの小学校に当時いた人や、以前に通っていた人たちからの語りを中心に案内してくださっている。死者〇〇人、

行方不明者〇〇人という数字だけではなく、それは一人一人の名前がある人たちであるということの大事にしたいとおっしゃっている藤間さんなので、一人一人の経験や記憶を中心に語ってくださっているのだと思う。そう考えた時に、展示パネルによって分かりやすくなっているぶん、一人一人の固有の語りという点では、なかなか言語化できないが、難しくなる側面もあるのではないかと感じた。2022年に震災遺構門脇小学校として始まってから毎年来ているが、震災遺構となってからも変化し続けていることを感じる。それは訪れる側であるこちら側の変化もあると思う。

その後南浜復興祈念公園内の「がんばろう！石巻」の看板に移動する。「がんばろう！石巻」の看板は5年ごとに作りかえられ、修繕されている。そうして5年後に更新し続けることを通して、思い出し続ける、忘れないことを目的としているようだ。ここにも思い出し続けるための行為や行動を通して、忘れないことを実践し続ける営みを感じた。忘れないことは覚えておくことではなくて、思い出し続けることなのかもしれない。

MEET 門脇では、一人一人の物語に焦点を当てた展示がされている。色々な方の語りがあるが、別の場所で話を聞いたり、交流したりする中で、語りの受け取り方が変化するときがある。新しく知ったことで、その一言の意味や重さが変化する。当たり前なことだけれど、それを強く実感する場所が毎年訪れている MEET 門脇だと思う。

2日目(7月29日)

石巻市で迎える朝。朝から震災遺構大川小学校に移動する。大川小学校では Team 大川未来を拓くネットワークの只野さんと佐藤さんから案内をいただく。只野さんは当時、生き残った小学生としてメディアで取りあげられる中で感じていたこと、今一緒に活動している佐藤さんとの思いを語ってくださった。そして副代表である佐藤さんから震災遺構大川小学校を案内していただいた。奥の山の手の崖のところで、ここで多くの児童が亡くなっているのが発見された、と黙祷をした。



Team 大川未来を拓くネットワークの只野さんはまた大川地区をみんなが帰ってくる場所にしたいと活動をされていた。未来に向けて現在に行われる活動。震災以前にあった大川小学校やその周囲の町の生活は私には見えない。生徒と一緒に来て、やはり生徒からは毎年大川小学校に対して、「被災した」という意味付けを強く持ってきたが、この場所に住んでいた人、通

っていた人たちにとって、その意味だけにフォーカスすることは違ったという感想を聞く。その通りだと毎年思うが、大川小学校について語る人はその人それぞれによって当然だけでも異なっていることを感じる。当然なのかもしれないが、この人だから感じる、知ってほしい語りが、大川小学校にはある。しかし同時に震災遺構大川小学校そのものが訴えかけてくるもの、語りかけてくるものもまた大きいと感じる。

「皆さんは大川小学校に何を求めて来られているんですか？」という問いかけは、今年大川小学校のあとに訪れた雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水利枝さんから投げかけられた問いだ。雄勝ローズファクトリーガーデンでは、午前中に徳水博志さんから復興教育に関わる講演を聞き、午後実際にガーデンで徳水利枝さんと地域のおばあちゃん(森の妖精さんたちと呼ばれている)と一緒に作業を行った。アロマをつくるためのラベンダーの花をより分ける作業で、生徒たちも話をしながら妖精さんたちと作業を進めていた。ここ数年、この時間は作業にしている。様々な話や情報を仕入れる中で、少しだけ作業という身体を使う時間によって、ここまでの学びが少し整理される時間だとも思っている。森の妖精さんたちとの作業は、ここまでの講演や展示物を見る形式とは少し違い、雑談の中で何かを知ることに近い。実際に高校生たちだからこそ語れることもあったのではないかと作業が終わり、締めくくりの感想交流の最後に利枝さんから伺った。しかし一方で3月11日のあの時どの場所で被災したか、語れる人語れない人、聞いても分からないだろうけれど知っていてほしいことなどについて伝えられ、その後先述した「何を求めて来られているんですか？」という問いにつながった。この答えについては私も生徒も沈黙するしかなかった。何よりも教員である私に向けられている気がした。その問いの意図もしっかりと受け取れていないかもしれないと不安に思いつつ、問われている私が答えるためには今後もここに通うしかないと思った。今後も来て、再会を繰り返す中でいつか答えが見つかるのではないだろうか。

3日目(7月30日)

みやぎ民話の会の方たちとの交流であった。みやぎ民話の会の方たちは、2026年の3月ごろに立命館大学の鶴野先生を通じて紹介していただいた。毎年立命館大学人間科学研究科の東日本大震災家族応援プロジェクトシンポジウムではご一緒させていただいていたが、直接交流させていただくのは今回が初めてであった。

事前学習でもzoomで鶴野先生や民話の会の現在の代表である島津さんらに講演いただいた。

午前中は2つのチームに分かれて、渡波地区とあゆみの地区で実際に採訪活動に同行する。

① あゆみの地区

お話を伺った方；佐々木さん・菅原さん・白井さん

民話の会の方；加藤さん・小田嶋さん

② 渡波地区

お話を伺った方；佐野さん・遠藤さん・大國さん

民話の会の方；島津さん・山田さん

内田は②の渡波の方に同行させていただいた。渡波地区では、佐野さん、遠藤さん、大國さんと3人の方からお話を伺った。佐野さんと遠藤さんは写真を使いながら身振り手振りで一生懸命説明してくださった。佐野さんは震災で津波を経験され、その後リフォームしてカフェを営まれていた。渡波地区の公園や慰霊碑、防潮堤に立ってもともとここに何があったのかを話してくださり、昼食時には写真と合わせて、カフェに来てくれた人たちが書き残したノートを見せていただいた。

遠藤さんは昨年、こころスマイルプロジェクトとの交流の際にも講演いただいていた、1年ぶりの再会となった。ただしお話を伺う場所が今年度は違い、その意味でも昨年度のお話と重なるところがあったが、むしろ2回目だからこそ受け止めることができたお話も合った

ように思う。生徒たちの中には1年ぶりに再会する人もいた。

大國さんは、渡波地区にある神社の神主さんである。写真はないが、震災当時のことについて語ってくださった。神社の中には写真はないが、絵は掲げられていた。印象に残っているのは、掲げられていた絵の中に日露戦争や第二次世界大戦に出征する兵士が残していった絵があったことだ。この地区から出征した兵士の絵だった。全員無事に戻ってこられたそうだが、大國さんが「当時は生きて帰ってきたいなんていうこともできないし、そういうことを願って描いた絵を自宅に残しておくわけにもいかないから、神社に残していったんだねえ」というようなお話をされたことだ。そのような思いを神社に絵として残したことで、そこから100年近く経った私がその想いをお話として伺うことができた、拾うことができたような気がした。そのとき、佐野さんや遠藤さんから伺ったお話も、同じようにこうやって聞いた私たちによってどこかに残って何年も後に何かの機会に誰かにきいてもらえるのか、と思った。言葉にするのが難しいが、資料館や博物館のような場所にきちんと保管されるのではなくて、私たちの間で残されていくもの。残っていくもの。まるでタイムカプセルのようだったと思った。大國さんが絵を指しながら話をされているのを聞きながら、まるでタイムカプセルを開けたような気持ちになったのだ。ただそれはタイムカプセルとして守ってきてくれた人がいるからで、語り継いできた人とそれを聴く人によって守られ、タイムカプセルとして残されてきたのだと思った。



午後は民話の会の方たちとの交流だった。今日のこの場は「合同採訪」だったのかどうかといった話から、話を聞くとときにはメモを取る事ばかりに集中してはいけないという話や、話を聴くことによって点が線になり、面になっていくという話。民話の会の皆さんが活動を積み重ねて来られる中で、どういったことに悩んでこられたのか、若いころはこんなことを思っていたといった話を聞いている高校生たちは、少し勇気づけられているようにも思った。実際に石巻市に来て震災体験を伺う中で、そのお話の何を受け止めるべきか、あるいは受け止めきれない自分自身の限界にも打ちのめされてきている高校生たちである。単にツアーを楽しむ、あるいは語ってくださる方の体験を大変だと聞くだけではなくて、その意味での難しさや悩みを抱えられる人たちがこの講座を受講しているからこそ、ツアーが進むにつれて表情が苦しくなっていく。だから民話の会の方たちが話を聴くことについて気を付けていること、逆に高校生たちに一緒に話を聴いていてどう思ったか、という形で話題をふってもらったことで、1日目、2日目とはまたちょっと違う、少し考えや姿勢を整理する時間になったのではないだろうか。この辺りは生徒の実際の感想が夏休み明けに出されるので、それを読んでまた考えたいと思う。今年度のシンポジウムや報告会などの場で生徒たちが何を考えたのかはぜひ伝えていってほしいと思う。今回のスタディツアー3日目のプログラムは聴くことを大切にされている民話の会の活動の一端にでも触れることで、生徒たちが聴くことについてメタ的に考えることを目的に行った。むしろ聴くことについて、どのように聴くべきかという点では引率教員である私も、正解を持っていない。だからこそ民話の会の方たちと活動するのは、私にとっても学びが多い時間、気づきが多い時間となった。

3日目の夜は毎年少し早めに夕食も済ませて活動プログラムは終える。そのためここ数年恒例となっているが、生徒たちは宿泊先のホテルの近くのイオンモールに遊びに行く。21時に閉まるので、1時間半ぐらい。高校3年生の子が高1、高2の子を誘って有志で行く形になるが、私もついていっている。夜でもイオンは地元の中학생や高校生、親子連れやカップルでにぎわっている。

地方におけるイオンモールは、何でもあるアミューズメント施設だと思う。私の地元にも中学生の時にイオンモールができて、中学・高校、その後も帰省するたびに思い出がたくさんあったイオンがあった。映画を見たり服を買ったり、友達と遊んだり…。思い出はたくさんある。イオンが近くにあるだけで、何でもそうう気がしたし、何かがあればイオンに行く。日常の一部でもあるけれど、ハレとケの日のうちのハレの日でもある。きっと石巻のイオンも誰かににとって同じような場所なのだと思う。だからゲーセンで楽しそうに遊んだり、ウィンドウショッピングを楽しんだり、何人かと一緒にフードコートで31アイスクリームを食べながら、

ここまでのツアーの感想を話したりする時間は大切なのだ。ツアーに来ている高校生も地元の中高生も、見ていたらそんなに変わらないと思う。たくさん学んでほしいと願ってツアーのプログラムを教員としては組むけれど、こうした隙間時間に石巻市を楽しむ術を見つけてくる高校生たちは本当に素敵だ。こうした隙間時間の中に私たちと石巻で何かつながる、重なる部分があるのではないかな。

4日目(7月31日)



石巻市での最終日。午前中は写真家の志賀理江子さんのオープンスタジオを訪ねる。昨年度のスタディツアーの際に講演してくださった宮城教育大学の山内明美准教授の紹介で、東京で志賀さんの作品を見てから来年度はぜひこの方のお話を伺いたいと思っていた。志賀さんは気さくな方で、オープンスタジオの中でご自身の作品を見せながら生い立ちから震災前に宮城に移住したお話、震災後の日々をお話しくださった。

志賀さんが防潮堤の建設によって生態系が壊れているという話もあると紹介されたあたりで、ある男子生徒が嗚咽を上げて泣き始めた。志賀さんがそれに気づ

いてちょっと場所を移動して、生徒たちにアイスを配られた。その間に本人に話をきくと、自分の地元の川に堰がつくられたことで勝手豊かにあった川の生態系が壊れてしまったという話を、漁師のおじいさんたちから聞いていたという。そして石巻市に来た時、大川小学校を訪れた時に北上川を見てきて、川の豊かなしじみなどについて只野さんから聞いたという。(この話を只野さんと移動する途中でしているのは私も見ていた。)しかし防潮堤がつくられていく中で生態系が破壊されていくことに対して、ここでも同じことが起きているのだと、急に見たわけではないがその景色、イメージが自分の中に流れ込んできて涙が止まらなくなってしまうと。本人も初めての経験で驚いていると語った。その子は自然や動物が好きで、どちらかといえば野生児に近いような感覚で、様々な社会問題や環境問題について考えることができた人だった。だからこそ泣き始めた時に、防潮堤の話だったのでもしかしたら…、と思っていたが、ここまで自分が見えていない景色に対して共感を持って感情を動かすことができるとは。思わず「石牟礼道子みたいやん」と言ってしまった。少し落ち着いてから志賀さんの講演に本人を戻して、本人の口からどうして涙があふれたのかを志賀さんに説明したが、それを聞いて志賀さんは「あの日(震災があった日)の夜(泣いている漁師のおじいさんたち)を見ているみたいだったよ」と返された。志賀さんと男子生徒のやりとりは忘れることができないだろう。

もう一つ志賀さんのお話の中で印象に残っているのは、作品を生み出すときに、「自分の身体の中に入り込んでくる、宿す感覚」といった言葉で説明されていたところだ。不思議とどちらかといえば私は「生みの苦しみ」の方が作品を生み出すときの表現としてはじっくりくるように思っていたが、確かに生み出される前に身体の中(思いなどの心や思考などの脳も含めて)に入り込んでくるはずだったが、そうした感覚になったことはなかった。もしかしたら男性か女性かということもあるのかもしれないとも思いつつ、その気づきがとても印象に残っている。

お昼ご飯を食べて気仙沼のリアスアーク美術館に移動する。お昼ご飯はオープンスタジオの近くで陶片ハンバーグが食べられるお店にしたが、そこで高校1年生の生徒がもう一人の引率教員に「色々なおいしいお店を知っていてすごい」(石巻市で最後の食事だったため)と言ってくれた。それは不思議とうれしかった。それだけ続けてきたことで出会ってきた人やお店があった結果だと思ったからだと思う。

1時間半ほどバスで移動して、リアスアーク美術館へ。いよいよ最後のプログラムである。初めての場所だったが、館長の山内さんが案内してくださった。最初に「歴史民俗史料から先に見ます。なぜだかわかります

か？」と生徒たちに問いかけられる。「震災で失われたものを知るためには失われる前を知らなければ分からないからです」と山内さんが説明されたところから始まった。リアスアーク美術館は資料館や博物館ではなく、美術館で、しかも自前で予算を立てて展示されているのがとても興味深かった。地下にある「被災物」一つ一つの物語もつけられていた。これらは実際に使っていた人から聞いた話というわけではないが、この地域に住んでいれば容易に想像できる物語らしい。ここでも石牟礼道子の『苦海浄土』を思い出した。さらに展示されているものは「瓦礫（がれき）」ではなく誰かの生活の一部



だったもので「被災物」なんだということも繰り返し強調しておっしゃられていた。このお話は2年ほど前の福島県浜通りスタディツアーに訪れた際に、「フレコンバックの中身は汚染物ではなく誰かの思い出の品だったんだ」と気付いた生徒が感想をつづっていたことを思い出した。確かにその通りだと思う。行政によって何月何日までなら無料で処分できますという期限が設定されることと、そのために震災後気持ちを整理するよりも先に、身の回りの物を整理しなければならない難しさを、目の当たりにしてきたことがある。

リアスアーク美術館を出て、一ノ関駅へと向かい、今年度の石巻市スタディツアーは終了した。3泊4日。5年目、5回目のツアーが終わり、来年もまた来たいと思いを抱いた。今年投げかけられた問いを、授業者として返すことができるのは、来年もまた来て来年の生徒たちの語る言葉の中にあるのではないかと思う。何かを続けることの難しさをかみしめながら、それでも、と思わずにはいられなかった。